



れた個体で、夏季にデントコーン畑に強く依存していた個体でした。以上のことから、本調査地において錯誤捕獲されたクマの9割超は農作物など人里の食べ物を利用していたのではなく、山の食べ物を食べていたクマであることが明らかになりました。

長野県では錯誤捕獲個体は原則通り放獣しています。しかし、県によっては有害駆除に切り換えて殺処分されるケースが少なくありません。しかし、この分析結果が示すように、非加害個体を多く駆除している可能性があります。錯誤捕獲個体を駆除し続けることは、被害対策として有効ではない可能性があります。また、多数のクマを駆除し続けることの生態系へのインパクトは分かっていません。錯誤捕獲個体の生息実態の解明をさらに進めていく必要があります。

(中下 留美子／(国研)森林研究・整備機構
森林総合研究所 野生動物研究領域)

▶ クマ出没要因の集中点検について

長野県では、今年の5月にクマの目撃件数が通常年の平均の1.8倍になり、クマによる人身事故も2件起きたことで、6月5日に「クマ出没注意報」が発令されました。これに伴い、県ではクマの出没について集中点検が行われています。これは、クマ対策の知識を有するクマ対策員が、県や市町村の鳥獣対策担当者とともに、クマの目撃地点を中心に現場検証を行い、出没要因を探って対策を検討することを目的としています。信州ツキノワグマ研究会でも3名がクマ対策員に委嘱されており、各地で点検を行ってきましたので、いくつか紹介します。

今年6月8日の早朝に高山村の住宅密集地で、新聞配達中の女性が住宅の庭先でクマに襲われました。なぜ、このような場所にクマが出没したのか、点検を行いました。庭には庭木やササが密生し、ここにクマが潜んでいたようです。車道沿いの住宅でクマが出没するような環境ではないのですが、約200m南に山裾が迫っており、



写真1. 高山村広域電気柵

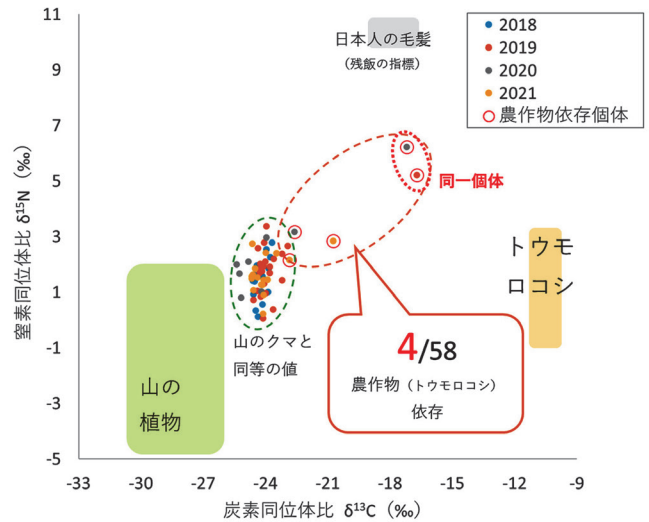


図2. 2018-21年に長野県伊那市周辺で錯誤捕獲されたツキノワグマの炭素・窒素安定同位体比
ツキノワグマの体毛を毛根から毛先まで切り分け、成長に沿って分析し、その平均値を图示した。

ここからクマが侵入したと考えられます。高山村では山裾に沿ってサル・イノシシ・クマなどを対象とした広域電気柵(写真1)が張られていますが、河川沿いのわずかな切れ目から侵入したようです。周辺には農作物や生ゴミなどクマを誘引する原因は見当たらず、おそらく若いクマが分散の過程で偶発的に住宅地に侵入した不測の事故だったと推測しています。事故後は庭のササを刈り払い、侵入路に自動カメラを設置するなど、適切な処置がされていました。また、隣接する須坂市でも広域電気柵が張られており、適切な対策が施されていました。このような地道な対策がクマの被害を防止する最も有効な手段で、特にクマの大量出没が起きたときに大きな効果を発揮すると思います。

一方、クマの人身事故が予見される危険箇所も各地で散見されます。例えば、ある養蜂場では電気柵の管理が悪く、何度もクマの被害に遭い、捕獲も続いていました(写真2)。周囲は藪もひどく、猟友会の方は捕



写真2. 養蜂場

獲檻の見回りも怖いとお話でした。別の例では、あるゴミステーションで近くにクマが出没しているにも関わらず、屋外にゴミ袋や空き缶などを出す場所がありました。このような場所では、クマを寄せ付けない適切な対策が必要です。

▶ 地域ぐるみのクマ対策へ

昨年度の長野県では、クマ対策について「ワークショップ」と「あり方検討会」という2つの大きな出来事がありました。

■クマとのすみ分けを考えるワークショップ

令和5年11月、私は、とある市町村の会議室にいました。「この辺りにクマが良く出没する。」「〇〇川を渡ってクマが下りてくるんだ。」「ゴミステーションにクマが餌付いたことがあった。」「このクワの木にクマが寄ってくるんだ。」

これは、「ゾーニング管理」を導入するための、ワークショップでの住民の皆さんの声です。「ゾーニング管理」は、ツキノワグマの生息域と人の生活域の境界を明確にしてすみ分けの徹底を図る、というものです。大きな航空写真と地図を数名で囲み、クマの出没情報を出し合います。

ワークショップは佳境に進みます。人の生活域(＝クマ排除地域)と、クマ生息域及び緩衝地域の境界をどこに引くべきか、排除地域での防除対策は、誰が何をするのか。「ゴミステーションはクマに荒らされない構造にできないか。」「果樹園や畑の電気柵は各自でやってもらうべきじゃないか。」「あの川は〇級河川だから市町村でなんとかならないか。」「こここのヤブ払いは地区で継続しよう。」

私は、ツキノワグマ対策の本質が、このワークショップにあると感じました。効果の上がる地域ぐるみのクマ対策への第一歩だと。

■あり方検討会

令和5年10月、イノシシを捕獲するために仕掛けたくくりわなの見回り中にツキノワグマに襲われたと見られる死亡事故が発生しました。平成18年に発生して以来のこと。緊急開催された野生鳥獣被害対策本部会議では、クマ出没地の緊急点検と対策の助言の実施、そして、今後のツキノワグマ対策のあり方を検討することが決定されました。

「長野県ツキノワグマ対策あり方検討会」(以下、検討会)では、専門家や市町村長から様々なご意見を頂戴しました。できる限りデータに基づき科学的な見地から議論いただくよう意を尽くし、黒江研究員などの研究成果も活用させていただきました。

検討会からの提言は、日ごろからのツキノワグマとの棲み分けの徹底に向けた取組と、大量出没時の問題個体の管理などの強化となりました。

大量出没時の個体管理(捕獲)の強化に関心が寄せられがちですが、会議後のメディア取材を受ける私は、

なお、集中点検はクマ出没要因の抽出と対策に役立つだけでなく、県や市町村の担当者が現場でクマ対策員と情報交換することで、対策技術の向上につながると考えています。

(岸元 良輔／NPO 法人信州ツキノワグマ研究会)



捕獲強化だけでなく、ヤブの刈払いなど日ごろの防除対策を基本とするゾーニング管理が、人身被害防止に重要だと伝わるよう気を配りました。

そして令和6年7月、県のツキノワグマ対策方針が決定しました。さて、いよいよ、地域ぐるみの対策につなげていく番です。

■人口減少社会とクマ対策

ゾーニング管理を導入するためのワークショップは、ツキノワグマの生態を知り、その上で自分たちの地域の出没要因を考え、さらに自分たちでできる防除対策を考え実践していくために、非常に重要な過程だと思っています。

しかしながら、冒頭のワークショップでの活発な意見交換が、果たして、どこの地域でもできるのか、心の中では不安を抱えています。高齢者数人しか住んでいない中山間地域では、防除対策の担い手がいけません。十数年振りに訪れると耕作放棄地が広がっていた、そんな地域がいくつもあります。小さな町村では、一人の職員がいくつもの業務を兼務し、専門性の高い職員を確保することができません。状況は今後、ますます厳しくなるのではないのでしょうか。

ICTとDX活用して、知恵をしぼって工夫を凝らして、ズクを出して…今後も我々のクマ対策の改善は続いていきます。しかしそれは、現場で起きている現実を見なければ絵空事になってしまう恐れがあります。

ニュースに映る自分の顔を見ながら、重みのない言葉だと自嘲し、苦いビールを飲むのでした。もっと現場の声を聞かなければ、と思いながら。

なので皆さん、私たちと一緒に、ツキノワグマ対策のワークショップを行いませんか!

(塚平 賢治／長野県林務部森林づくり推進課 鳥獣対策担当課長)

